

## 教育研究・センター運用分科会 「大学活動の見える化を考える」講評

只木 進一

佐賀大学教授・CAUA 運営委員

コンピュータやインターネットは、初めは研究の、そして教育の個々の活動を支える技術として大学に導入されました。そして、コンピュータとインターネットが、「情報基盤」と呼ばれるようになり、組織としての教育・研究を支える技術となりました。近年の大きな特徴は、情報技術が、教育・研究の成果や質の向上度を客観的に示すデータの収集・管理などの手段として期待されているところです。いわゆる、IR (Institutional Research) を支える情報システムが求められているようです。

常盤先生には、法政大学における教育活動に関する指標の収集・管理について、紹介をして頂きました。「運営」があっても「経営」が無いと指摘される大学においては、データを集めるところから、大きな障害があります。データを集める目的を法人として明確にする、データの所在を明らかにして、データの流通路を作る、分析して見えるに提示するというプロセスの整理が必要です。法政大学にあっては、目標に向かって整備された体制が見えました。特に、分析結果の共有という点が重要と感じました。

一方で、指標として示されているものの多くは、「学校基本調査」と重なっています。あるいは、大学評価・学位授与機構の「大学情報データベース」と重なっています。つまり、各大学は、データをまとめてはいたが、提出するだけで、分析・活用を怠っていたということのようです。情報システムの問題というよりも、情報活用のスキル不足が深刻です。『「情報化」＝『ワープロによる清書』』という誤りのツケを払わなければならないようです。

情報基盤の重要性が高まる一方で、情報基盤の運用の高いコストと脆弱性が深刻な問題となっています。これは、大学等の教育研究機関に固有な問題ではなく、情報系産業にも及ぶ問題であることが、波田野氏の講演から分かりました。

情報システムの場合、他の工業製品と異なる部分が、運用の領域の広さです。工業製品には、開発・設計、製造、運用・保守の工程があります。前者二つは、限りある時間で行われるのに対して、保守・運用は終わりがありません。情報システムは、この部分が非常に大きいのが特徴です。そして、運用に大きなコストがかかっていることも重要なポイントです。運用・保守部門は、コストばかりがかかる部門と見なされがちです。

波田野氏は、運用の標準化を通じて、運用・保守コストの削減、開発・設計へのフィードバック、そしてサービスレベルの向上を提案されました。運用の標準化は、現状から考えると非常に難しいという印象です。しかし、運用の標準化によって、仕様の明確化、障害時の対応の迅速化、そして何よりも、運用の属人性の低下による安定な運用が期待できます。情報システムに関わる者として、熟慮すべきポイントですし、研究テーマにもなり得ます。